

「ストレス」^①による「去」と「来」の文法上の 意味・機能についての分析

萬 清 華

目 次

- 0. 序 論
- 0.1. 「去」・「来」と異なる「音等」
- 0.2. 従来の観点と筆者の観点
- 0.3. 主要内容
- 1. 重音類「去」と「来」
- 1.1. 意味特徴
- 1.2. 機能と意味
- 1.2.1. 機 能
- 1.2.2. 意 味
- 1.3. 特徴と区別
- 1.3.1. 特 徴
- 1.3.2. 区 別
- 2. 重音等「^l去/^l来」
- 2.1. 「不変意味」と補語
- 2.1.1. 「不変意味」
- 2.1.2. 補 語
- 2.2. 重音等の格
- 2.3. 空時範疇
- 2.3.1 空間・空一時範疇
- 2.3.1.1. 空間範疇

- 2.3.1.2. 空一時範疇
- 2.3.2 時一空・時間範疇
 - 2.3.2.1. 時一空範疇
 - 2.3.2.2. 時間範疇
- 3. 次重音等「₁去／₁来」
 - 3.1. 「変化意味」と「将」
 - 3.1.1. 「変化意味」
 - 3.1.2. 「将」の意味
 - 3.2. 具体と抽象
 - 3.2.1. 具体的行為
 - 3.2.2. 抽象的行為
 - 3.3. 次重音等の格
- 4. 終りに

0. 序 論

0.1. 「去」・「来」と異なる「音等」

「去」と「来」は日常用語において、最も常用される単語である。それぞれ、『現代漢語三千常用詞表』(1985)において、第35位と第26位におかれている。筆者が「「去」と「来」の動詞の類」(『中国語学』242号, PP.22~31。以下「拙論」と省略する。)に述べたように、

中国語の標準語において、「去」と「来」は、「二類」(1.重音類, 2.軽音類), 「四等」(①重音等, ②次重音等, ③次軽音等, ④軽音等)の軽重音等(本論では「音等」と呼ぶ)形式のすべてに分布している。

その論文の中で、中国語の標準語で表現された二類, 四等軽重音等がそれぞれ属している「去」と「来」は以下のように示された。

- 1.重音類: (f¹), (f₁) で重音等と次重音等を示す)

①重音等, 例えば,

(1) 我¹去¹ / 来¹学校

(私は学校に行く / 来る)

②次重音等, 例えば,

(2) 我₁去 / 来₁買菜

(私は野菜を買いに行く / 〇²)

例(1), (2)の中の「去 / 来」はそれぞれ重音等と次重音等 (或いは, 重音, 次重音と呼ぶ) である。

2. 軽音類 (「₁」, 「⁰」で次軽音等と軽音等を示す)

③次軽音等, 例えば,

(3) 捉₀去 / 来₀一只鸡

(にわとりを一羽捉まえていく / くる)

④軽音等, 例えば,

(4) 我買菜⁰去 / 来⁰

(私は野菜を買いに出かける / 買ってくる)

例(3), (4)の中の「去 / 来」はそれぞれ次軽音等と軽音等 (或いは, 次軽音, 軽音と呼ぶ) である。

ここでは, 重音類 (重音等と次重音等) の方を「移動」(中国語では: 位移) の意味を表す動詞とした。軽音類 (次軽音等と軽音等) の方がある種の「方向」(中国語では: 趨向) の意味をもつ「補助語」(虚詞) と認める。したがって, 「方向」とは動詞「去 / 来」の意味を表すのではなく, 軽音類の方の文法意味を示していることになる。『現代漢語三千常用詞表』において, 「去」と「来」がそれぞれ第 35 位と第 26 位におかれているのは, その漢字で表記された動詞 (実詞) と「補助語」(虚詞) の和にもとづく結果だといえる。

0.2 従来の観点と筆者の観点

今迄の中国語文法研究がすべて「語音に関与しない状態で進んできた」もの (史有為・1992.PP.119) なので, 「去」と「来」についての研究は「一種

の意味]、「多種の用法」という解釈に限られていた。「一種の意味」とは、「去」と「来」が動詞として、文において、「相反する方向」、「動作の相反する方向」、「反対の方向への移動」等を示しているものとされた。これら似たような表現は⁹⁾、筆者が七十年代末期以来の関係する論著から帰納した代表的な三種の観点である(略称:相反する方向)。「多種の用法」とは、「去」と「来」の文法機能が極めて複雑であることを指すものである。それら研究の中で、湯廷池の研究が最も詳細である。湯氏(1979.PP.301~320)『「来」と「去」の意味と用法』において、二者の用法は七種類に帰納され、「他動」、「使役」、「助動」、「非方向」、「補語」、「比喩」、「時間」とされた。

ここでは、その七種類の用法と一種の意味との対応が、十分に科学的な根拠を備えているかどうかについては討論しないが、とくに、強調したいのは、これまでの諸研究においては、言語表現における音等の区別が問題とされていないこと。漢字の「去」と「来」で表示したものをすべて動詞と認めていること。それら各種の用法の中から、ある一種の用法を取り出し、代表的用法として、定義づけていることなどである。

したがって、各人の考えにより、代表的とされる用法が異なると、その定義も異なる。これが、今までの研究において、「去」と「来」の定義がはっきりしなかった原因だと考える。

筆者は、言語表現における意味に対応する「律動形状」—音等により単語を分類した。それによって、意味を統一することができるのである。例えば、重音類と軽音類「去」、「来」は文において、絶対に同じ意味を表さない。漢字は同じだが、拼音で表記すれば、重音類の方は四声の中のある種声調をつけ(「去—qù」,「来—Lái」),軽音類の方は軽声調とし,(「去—qu」,「来—Lai」)とすべきである。したがって、それらは同類の品詞に属さないはずである。当然、用法も全く異なる。ここでは、同一の漢字で表されているこれらの異なる音等をもつ「去」と「来」を二つの種類に区分した。

音等は直接に意味に対応するので、文法語音構造の特徴的な標識とすることができる。この観点にもとづいて、以下の研究を展開する。

0.3. 主要内容

(1)本論では、紙幅制限があるので、重音類（重音等と次重音等）「去／来」のみを論じる。

(2)本論では、「文法語音構造」の角度から、文における「去／来」の意味特徴及びそれらの文法機能の中の問題について、重点的に分析を加えた。

本論の分析を通して、「去／来」が主要動詞となる場合には必ず重音等となり、「不変意味」を表し、副助動詞となる場合には必ず次重音等となって、その後の重音等主要動詞とともに「移動—将—行為」の「変化意味」を表すことを証明した。

(注)：本論で用いた例文は自分で作った一部分を除き、趙元任、朱德熙、湯廷池、陸儉明等の著作から借用したものであるが、文中では、一一注記しなかった*。

1. 重音類「去」と「来」

1.1. 意味特徴

重音類「去」と「来」の意味は「移動」であるが、二者が必ずしも相反する方向を示すとは限らない。例えば、序論の例(1)と例(2)の中で、「¹去/¹来」と「₁去/₁来」とが同一方向を表すことができるのははっきりしている。

したがって、二者の意味特徴の区別が「相反する方向」ではないと考えた。拙論に述べた通り、二者の意味特徴が同一方向——「時計まわりの円弧線にそって移動する」ことであるとするならば、二者の意味特徴の区別は、「再帰話者 [位置]」（或いは、移動の初始起点に戻る）が可能か否かの区別と

*作成の際に、松本昭先生のご指導と貴重なご意見を頂いた。記して感謝申しあげる。

共通部分における「主従関係」上の区別になるであろう。重音類「去」と「来」とが示している移動方向は従来の観点「相反する方向」とは異なっているといえよう。

1.2. 機能と意味

1.2.1. 機能

重音類において、重音等「¹去/¹来」はいつでも、文中に主要動詞として、単独で移動の意味を表している。そのもつ標準文型は序論の例(1)のようなものである。格に記入すれば、それは「¹V_x/¹V_y | N_p」である(第2.2.節参照)。それを重音等「¹去/¹来」の基本的な「標準文」格という。

次重音等「₁去/₁来」は、常に、文中で副助動詞として、他の主要動詞の前にあって、その主要動詞と複合して、目的性をもつ行為のための移動を表している。そのもつ標準文型は序論の例(2)のようなものである。格に記入すれば、それは、「₁V_x/₁V_y | V_p」である(第3.3.節参照)。それを次重音等「₁去/₁来」の基本的な「標準文」格という。

1.2.2. 意味

文において、重音等で表現されている「移動」意味は「不変意味」を表している。そのもつ空間範疇と空-時範疇と時-空範疇を指定するのは、場所、動量、時間量を表す補語、即ち、「₁N_p」である。「¹去/¹来」(「¹V_x/¹V_y」)の意味は、常に、中心として、いかなる文の形の変化があっても、依然として、変わらない特徴をもっている。

次重音等で表現されている意味が、主要動詞と連用する場合に限って、「変化意味」を表している。「₁V_x/₁V_y」と「¹V_p」の間に、「助-動」関係が、「将」(近い将来)の意味をはっきり現しているだけでなく、もともと単純な移動が表す意味を「移動-将-行為」の「変化意味」に転化させたのである。この場合に、「将」の意味は他の時間の制限を受けず、過去、現在、未来等のすべてにおいて「将然」を示すもので、(何かを)「しようとして移動する」

という部分は「不」による否定を受けない(例(50)参照)。

ここで、その「不変意味」、「変化意味」を保っている言語形式上で最もはっきりしているのは、音等である。音等を変えれば、意味も、文構造も、音等の変化にしたがって変わっていく。それゆえ、文の成分とする意味と機能は音等により決められるのである。

1.3. 特徴と区別

1.3.1. 特徴

重音類の中の重音等と次重音等との特徴は、以下の例では、はっきり表現されている。例えば、

次の例(1)~例(7)の中の「¹去/¹来」が重音等にあたる。

- (1) 我¹去/¹来₁学校
(私は学校に行く/来る)
- (2) 我第一次¹去/¹来₁你那儿
(私は始めて君の所に行く/O)
- (3) 我從來沒有¹去/¹来過₁北京
(私は今まで北京に一回も行った/O ことがない)
- (4) 北海公園我¹去/¹来過₁好几次
(北海公園には私は何回も行った/来たことがある)
- (5) 我¹去/¹来的₁地方有山有水, 風光明媚
(私が行った/O 所は山もあり, 水もありで, 風光明媚であった)
- (6) ¹去/¹来₁一会儿
(ちょっとの間行って来る/O)
- (7) 你先¹去/¹来₁一封信
(君はまず手紙を出し/よこさない)

次の例(8)~例(16)中の「₁去/₁来」が次重音等にあたる。

- (8) 我₁去/₁来₁買菜

(私は野菜を買いに行く／0)

- (9) 我第一次₁去／₁来₁参加全国性的中国語学學術研討会

(私は始めて全国的な中国語学の學術研討会に参加しに行く／来た)

- (10) 我從來沒有₁去／₁来₁听過茶館的評書

(私は今まで一回も茶館でやっている評書を聞きに行った／来たことがない)

- (11) 北海公園我₁去／₁来₁划過好几次船

(北海公園には私は何回も船をこぎに行った／来たことがある)

- (12) 我₁去／₁来₁遊覽的地方有山有水，風光明媚

(私が観光に行った／0所は山もあり，水もありで，風光明媚であった)

- (13) ₁去／₁来₁玩一会儿

(ちょっとの間遊びに行つて来る／0)

- (14) 你先₁去／₁来₁写一封信

(君はまず手紙を一通書き 0／0 なさい)

- (15) 我₁去／₁来₁想办法

(私はいい方法を考え 0／0 よう)

- (16) 用堅忍不拔的精神₁去／₁来₁克服困難

(堅忍不拔の精神で困難を克服して行く／0)

上掲した例(1)～例(16)から，重音等と次重音等が異なることが明らかであろう(第2節，第3節参照)。

1.3.2. 区 別

上の例では，重音類の「去／来」の文法特徴と差異がはっきり表されている。次の表1.と表2.で，それぞれを帰納してみよう。

表1. : 重音類「去/来」の特徴

特 徴	^l 去/ ^l 来	_l 去/ _l 来
文法語音	音等 (重)	音等 (次重)
文法機能	主要動詞	副助動詞
文法意味	移 動	移動-将-行為
文法構造	^l V _x / ^l V _y N _p	_l V _x / _l V _x ^l V _p

表2. : 重音類「去/来」の特徴差異

特徴差異	^l 去/ ^l 来	_l 去/ _l 来
音 等	重音等	次重音等
表現方式	単 独	複 合
意味表現	不変意味	変化意味
後続成分	補 語	述語フレーズ

2. 重音等「^l去/^l来」

2.1. 「不変意味」と補語

2.1.1. 「不変意味」

上に述べたように、文において重音等「^l去/^l来」は、いつも単独で「移動」という意味を表している。重音等が変わらないものとするれば、その意味も変わらないし、文型も変わらない。単独で意味を表すのは、それだけで文になるばかりでなく、同時に存在する他の文の成分との間に時間の関与が生じないものであるので「不変意味」という。単一でも、他の文成分がある場合でも、自らのもつ空間範疇の内包を表す文を構成する。例えば、1.3.節の例(1)を見ればわかる。例(1)では、「^l去/^l来」は主要動詞として、「我」(私)で表された起点(O)から、ある止点(P)「学校」へ移動することを表わしている

が、その止点を取除いて「去／来」だけでも、ある指定する止点に移動する意味を表すことができる。

2.1.2. 補 語

重音等「去／来」の基本的な標準文「 ${}^1V_x / {}^1V_y | N_p$ 」において、その名詞フレーズ「 $| N_p$ 」は場所、動量、時量を表す補語である。意味上で、「 ${}^1V_x / {}^1V_y$ 」の空間・空-時・時-空範疇を指定するもの（第2.3.節参照）。例えば、1.3.節の例(1)～例(7)では、その異なる補語をもつ標準文及び「易位文」をも含んでいる。（「易位」文については別の論文で詳述の予定。以下同様）そのなかの例(1)と例(2)では、「 $| N_p$ 」は場所を表す名詞フレーズ補語であって、移動者（自主移動者と非自主移動者を含む）がその起点から、その指定された止点へ移動することを表している。例(1)で説明しよう。

(1) 我¹去／¹来_|学校

（私は学校に行く／来る）

その中で、

我（私）：「話者-位移者」、最初の「移動起点」Oを示す、

学 校：「移動、到着する場所」、「移動止点」Pを示す、

¹去／¹来（行く／来る）：同一の方向への移動。

例(1)では、「我」（私）が最初の起点から、「学校」という指定された止点Pへ移動することを表し、¹去／¹来は同じ起点Oから、同じ止点Pまで、同一の方向へ移動するのを表していることになる（第2.3.1.1.節図1.と図2.参照）。

そのほか、例(3)は例(4)のような文の否定型である。例(4)では、「 $| N_p$ 」は「動量」を表す名詞フレーズ補語であって、同じ移動の全過程O(O')→(P)P'を完成する「回数」を表している。即ち、その指定した場所「北海公園」へ移動して、戻った（起点に再帰した）量を示すのである（第2.3.1.節図3.参照）。例(5)は、「関係子文」であるので、一つの「易位」文と考える。例(6)では、「 $| N_p$ 」は「時量」を表す名詞フレーズ補語であって、移動の全過程O(O')→(P)P'の経過する「時量」を表すとともに移動の起点より離れて、どこかの止点へ移動して、起点に再帰することを表す（第2.3.1.節参照）。

もう一つの例(7)では、「 ${}_1\text{Np}$ 」は移動させられたものの数量を表す名詞フレーズであって、それをも「易位」文と認める。

それらの標準文型「 ${}^1\text{Vx}/{}^1\text{Vy}/{}_1\text{Np}$ 」に相当する例の中に、三種の同様音等で表現される「 ${}_1\text{Np}$ 」補語がある。

同様音等の(場所, 動量, 時量)三種の補語をもつ標準文型の下位文型を区分することができる(第2.2.節参照)。文法語音構造上では、音等の同レベルにある文法構造は、必ず同レベルの意味に対応している。したがって、この三種の補語も意味上同じレベルのことを指定しているのである(第2.3.節参照)。

2.2. 重音等の格

上述の分析によって、重音等「 ${}^1\text{去}/{}^1\text{来}$ 」の標準文を格に記入することができる。

設 定：

- (1) 場所を表す名詞フレーズ → 「 ${}_1\text{Np}'$ 」,
- (2) 動量, 時量を表す名詞フレーズ → 「 ${}_1\text{Np}''$ 」,
- (3) 動量を表す文の「 ${}_1\text{Np}''$ 」 → 「 ${}_1\text{Np}''\text{a}$ 」,
時量を表す文の「 ${}_1\text{Np}''$ 」 → 「 ${}_1\text{Np}''\text{b}$ 」,
- (4) 重音など標準文型 → S_1 ,
下位標準文型 → S_1' 。

S_1 格を①とする：

$$\textcircled{1} \quad S_1 = {}^1\text{Vx}/{}^1\text{Vy}/{}_1\text{Np}$$

S_1' 格を②とする：

$$\textcircled{2} \quad S_1' \begin{cases} \text{(a)} = {}^1\text{Vx}/{}^1\text{Vy}/{}_1\text{Np}' \\ \text{(b)} = {}^1\text{Vx}/{}^1\text{Vy}/{}_1\text{Np}'' \begin{cases} {}_1\text{Np}''\text{a} \\ {}_1\text{Np}''\text{b} \end{cases} \end{cases}$$

$S_1'(b)$ を, $S_1'(b)^a$ と $S_1'(b)^b$ とで示す。

次の文がそれぞれ $S_1'(a)$, $S_1'(b)^a$, $S_1'(b)^b$ を表現する例である。

- (17) 我¹去¹/来¹虹橋机场 (S₁'(a)=¹V_x/¹V_y|Np')
- (私は虹橋空港に行く/O)
- (18) ¹去¹/来¹兩三次 (S₁'(b)^a=¹V_x/¹V_y|Np''a)
- (二, 三回ぐらい行く/来る)
- (19) 沒想到他¹去¹/来¹了一年 (S₁'(b)^b=¹V_x/¹V_y|Np''b)
- (彼がまる一年間も行って/来ているとは思ってもよらなかった)

2.3. 空時範疇

2.3.1. 空間・空一時範疇

上述によると、「¹去¹/来¹」の空間範疇を表す文は S₁'(a)であり空一時範疇を表す文は S₁'(b)^aである。

2.3.1.1. 空間範疇

その空間範疇におけるいかなる点をも具体的な移動の至る場所として指定するのは、S₁'(a)における「¹Np'」である。

その指定された具体的な移動して到達する場所が相対的固定的であることを示しているのである。拙論に述べたように、中国語における「去」と「来」動詞は、同一方向への「時計まわりの円弧線にそって移動する」ことを示している (図 1., 図 2. 参照) (詳しい解釈は拙論, PP.28~29 参照)。

図 1.

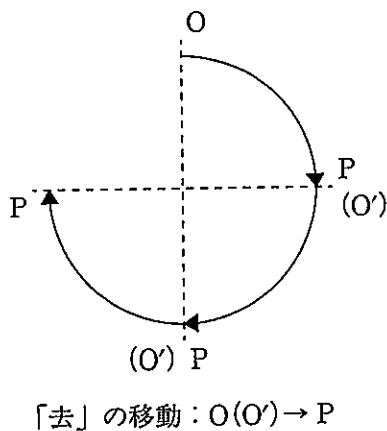


図 2.

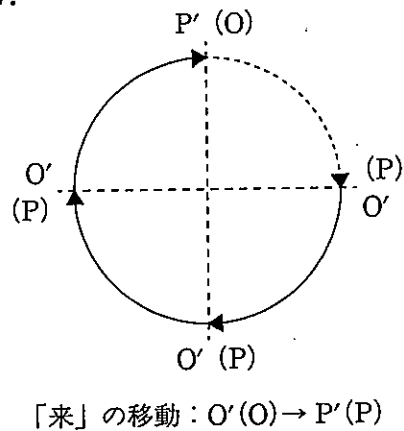


図1.は「去」の移動図示であり、図2.は「来」の移動図示である。「去」の移動は移動が最初の起点「O」から、或いはその以外の任意の起点「(O')」から、動いて、ある指定される止点「P」につき、「来」の移動は移動が任意の起点「O'」から（ある場合には最初の起点「(O)」から）動いて、ある指定される止点「(P)」についても、最終止点「P'」、即ち、話者の位置、最初の起点に再帰しても、皆可能である。要するに、それらでそれぞれの空間範疇における移動のことを解釈することができるのである。

(1) 「去」の移動より

「最初起点」：O (移動者=話者の場合の起点 | 主位起点)

「非最初起点」：(O') (移動者≠話者の場合の起点 | 从位起点)

「非最終止点」：P (共通止点 | 主位止点)

移動方向，方式：→ (時計まわりの円弧線にそって移動する)

「去」の移動：O(O')→P

空間範疇：O(O')→P

(O 起点の場合、O→P, O' 起点の場合 O'→P)

例えば、1.3.節の例(1)を変えてみよう、

(20) 去|学校 O(O')→P

(21) 我|去|学校 O→P

(22) 你/他|去|学校 O'→P

(2) 「来」の移動より

「非最初起点」：O' (移動者≠話者の場合の起点 | 主位起点)

「最初起点」(ある場合)：(O) (移動者=話者の場合の起点 | 从位起点)

「最終止点」：P' (移動者≠話者の場合の最終止点 | 特有の止点)

「非最終止点」：(P) (共通止点 | 从位止点)

移動方向，方式：(「去」のと同じ)

「来」の移動：O'(O)→P'(P)

空間範疇：O'(O)→P'(P)

(O 起点の場合、O→P, O' 起点の場合、O'→P'(P))

例えば、例(20)~(22)中の「去」を「来」に換えてみよう、

- (23) 来₁学校 O'(O) → P'(P)
- (24) 我₁来₁学校 (O) → (P)
- (25) 你/他₁来₁学校 O' → P'(P)

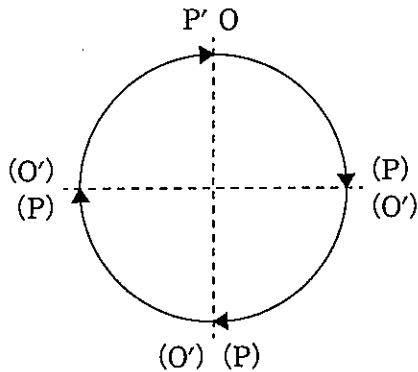
2.3.1.2. 空一時範疇

その空一時範疇において、移動の全過程 O(O') → (P)P' の回数は「動量」で指定される。それは S₁'(b)^aにおける「₁Np''a」である。

その移動の全過程は「去」と「来」の和より、構成されている。それを「去類」の移動と呼ぶ。

図3.は「去類」の移動図示である。ここで「去」と「来」とは共通するのである。この『「去類」の移動』で「去/来」の空一時範疇における移動のことを解釈することができるのである（詳しい解釈は拙論, PP.30 参照）。

図3.



「去類」の移動: O(O') → (P)P'

(3) 「去類」の移動より,

「去類」の移動: O(O') → (P)P'

空一時範疇: O(O') → (P)P'

(O 起点の場合, O → P → P',

O' 起点の場合, O' → P → O')

「去」, 「来」 共通。

例えば, 1.3.節の例(4)を書き直してみよう。

- (26) 北海公園我₁去/来好几次 (O → P → P')
- (北海公園には私は何回も行き/来たい)
- (27) 北海公園他₁去₀/来₀好几次了 (O' → P → O')
- (北海公園には彼はもう何回も行った/来た)
- (28) 去/来過好几次 { O → P → P'
- { O' → P → O'
- (何回も行った/来たことがある)

例(26)では、 $O \rightarrow P \rightarrow P'$ の移動の全過程、即ち、「我」のOの起点から、北海公園Pへ移動し、また、戻るP'こととその数量「好几次」を表している。例(27)では、起点の位置が変わったが、 $O' \rightarrow P \rightarrow O'$ の移動の全過程、即ち、「他」O'の起点から、北海公園Pへ移動し、また、戻るO'こととその数量「好几次」を表している。例(28)では、二つの意味を解釈できる。

2.3.2. 時—空・時間範疇

前述によると、「^l去/^l来」の時—空範疇を表す文は $S_1'(b)^b$ である。筆者の研究によると時間範疇を表すのは、それに「動態+時態」を加えたものである。

2.3.2.1. 時—空範疇

その時—空範疇において移動の全過程は「時量」で指定される。それは $S_1'(b)^b$ における「 ${}_1 Np''b$ 」である。

$S_1'(b)^b$ が表す時—空範疇は移動の全過程に要する時間量で、「去類」の移動 $O(O') \rightarrow (P)P'$ より解釈できる (図3.参照)。

(4) 「去類」の移動より

「去類」の移動： $O(O') \rightarrow (P)P'$

時—空範疇： $O(O') \rightarrow (P)P'$

(O 起点の場合、 $O \rightarrow P \rightarrow P'$ 、

O' 起点の場合、 $O' \rightarrow P \rightarrow O'$)

「去」、 「来」 共通。

例えば、1.3.節の例(6)「^l去/^l来—会儿」は時—空範疇を表す文である。それに起点を指定するものを加えてみよう、

(29) 我^l去/^l来_l—会儿 $O' \rightarrow P \rightarrow P'$

(30) 你^l去/^l来_l—会儿 $O' \rightarrow P \rightarrow O'$

(31) ^l去/^l来_l—会儿 $\begin{cases} O \rightarrow P \rightarrow P' \\ O' \rightarrow P \rightarrow O' \end{cases}$

例(29)では、 $O \rightarrow P \rightarrow P'$ の移動の全過程、即ち「我」のO起点から、ある場所へ移動し、起点に再帰するP'こととその時間量「一会儿」を表している。

例(30)では、 $O' \rightarrow P \rightarrow O'$ の移動の全過程、即ち「你」の O' 起点から、ある場所へ移動し、起点に再帰する O' ことと時間量「一会儿」を表している。例(31)では二つの意味を解釈できる。

2.3.2.2. 時間範疇

時一空範疇を表す $S_1'(b)^a$ に「動態+時態」を加えれば、時間範疇を表す文となる。音等でも、意味でも、いずれも変わる。音等上で、「動態」は軽音等で表現され、「時態」は次軽音等で表現される（中国語における「時制」について、他の論文で詳述）。例えば、「去/来」に「 \sim 了 \dots 了」を加えて、「現在完了」、「 \sim 過 \dots 了」を加えて、「過去完了」の意味がつくのである。その場合には、「去」は移動の始まった時点から、話す（現在或いは過去）までの時間量を表し、「来」は移動止点についた時点から話す（現在或いは過去）までの時間量を表すことになる。例えば、例(29)~(31)を書き直してみよう、

(32) 我¹去⁰了⁰ | 一会儿⁰了⁰ (移動の始まった時点から、話す（現在）までの時間量を表す。次の「去」例同様)

(33) 我¹来⁰了⁰ | 一会儿⁰了⁰ (移動止点についた時点から、話す（現在）までの時間量を表す。次の「来」例同様)

(34) 他¹去⁰了⁰ | 一会儿⁰了⁰ (彼が行ってからしばらくたった)

(35) 他¹来⁰了⁰ | 一会儿⁰了⁰ (彼が来てからしばらくたった)

(36) ¹去⁰了⁰ / ¹来⁰了⁰ | 一会儿⁰了⁰

(37) 我¹去⁰過⁰ | 一会儿⁰了⁰ (同上、ある過去の時点までの時間量を表す。下例同様)

(38) 我¹来⁰過⁰ | 一会儿⁰了⁰

(39) 他¹去⁰過⁰ | 一会儿⁰了⁰ (彼はしばらくの間行っていた)

(40) 他¹来⁰過⁰ | 一会儿⁰了⁰ (彼はしばらくの間来ていた)

(41) ¹去⁰過⁰ / ¹来⁰過⁰ | 一会儿⁰了⁰

上掲例見れば、時間範疇を表す文は、空間範疇から離れていることが明らかである。

明らかなように、空間・空一時・時一空範疇を表す文「S₁'(a)」, 「S₁'(b)^a」, 「S₁'(b)^b」は、音等上同レベルにある。時間範疇を表す文の場合には、音等上のレベルが異なった要素（例えば、了^o, 過^o, など）が加わっている。

3. 次重音等「₁去／₁来」

3.1 「変化意味」と「将」

3.1.1. 「変化意味」

次重音等「₁去／₁来」は文において、いつでも副助動詞とし、他の主要動詞の前で、それと複合している意味を表している。その「変化意味」は「移動－将－行為」である。この意味とは「₁去／₁来」のみに属するものではなくて、主要動詞にも属するものである。そして、その形式と意味とは不可分である。例えば、1.3.節の例(8)を以下の文に分けてみよう。

(8) 我₁去／₁来¹買菜

(42) 我¹買菜 (私は野菜を買う)

(43) 我₁去／₁来

(44) 我¹去／¹来

例(42)～例(44)は、一見すれば、皆例(8)から変えたものだが、実は違う。例(42)の主要動詞とする「¹買」は不変意味を表しているので、その意味は交易行為のみを表す。例(8)の中の「₁去／₁来¹買菜」の「買」の意味と異なっているがはっきりわかるであろう。例(43)は音等が変わらなかったもので、後の主要動詞の意味を暗示しているのである。例(44)の「¹去／¹来」は重音等として、例(42)の中の「¹買」と同じように不変意味を表している。したがって、その後に暗示される意味が必ず「¹Vp」ではないことがわかる。もう一度、例(8)を見て、例(42)と比較しよう。

例(8)は、「移動－将－行為」を表しているが、具体的な交易行為（「¹買」（買う）の意味）を表すわけではない。例(8)の中の「₁買菜」は移動を通して、その行為が「将」「実現」を表すのであるので、例(8)は例(42)のと同じ重音等の「¹買」

であるが、意味は異なっている。

そのほか、「 ${}_1Vx / {}_1Vy^1Vp$ 」の間に、副詞だけではなく、「動態+時態」を表すものも加えられない。例えば、

(45) * 我₁去 / ₁来不¹買¹菜

(46) * 我₁去⁰了 / ₁来⁰了¹買⁰菜⁰了

(47) * 我₁去⁰過 / ₁来⁰過¹買⁰菜⁰了

例(45)~(47)の文が成立しない。

上の例から、「 ${}_1Vx / {}_1Vy^1Vp$ 」の「変化意味」が相互依存的であることがわかる。

3.1.2. 「将」の意味

上述により、「 ${}_1Vx / {}_1Vy^1Vp$ 」の「変化意味」に存在している「将」の意味はいかなる場合にもかわらず、「動態+時態」の制限も受けないものである。例えば、例(8)を次のように変えてみよう。

(48) 我₁去 / ₁来⁰買⁰過⁰菜⁰了 (過去完了)

(私は行って / 来て野菜を買った)

(49) 我₁去 / ₁来⁰買⁰了⁰菜⁰了 (現在完了)

(私は行って / 来て野菜を買った)

例(48)と例(49)には「動態+時態」を加えている。(48)は「過去完了」、(49)は「現在完了」になっているが、依然として、「去买」の間の「将」の意味が変わらない。

たとえ「 ${}_1Vx / {}_1Vy^1Vp$ 」に否定副詞「不」を加えても、「将」の意味も変わらない。

例えば、

(50) 我不₁去 / ₁来¹買¹菜

(私は野菜を買いには行か / 来ない)

例(50)で否定されたのは、重音等「¹買」の「¹Vp」で、次重音「₁去 / ₁来」は、文において否定されないのである。結局、「将」の意味が必ず「 ${}_1Vx / {}_1Vy^1Vp$ 」の間に存在している。

その「将」は「将然」を表す「貌」であると考えている。

3.2. 具体と抽象

3.2.1. 具体的行為

「₁Vx/₁Vy¹Vp」において、「¹Vp」は、近い将来に実現することを表しているの、それは具体的行為でも、抽象的行為でも表わしている。ただし、音等是不変。具体的行為と抽象的行為とは「¹Vp」の二つの小類となっているのである。例えば、1.3.節の例(8)～例(16)の中では、例(8)～例(14)における「¹Vp」は具体的なのであり、例(15)、例(16)のは抽象的なのである。

例(8)～例(10)は例(1)～例(3)の「₁Np」を「¹Vp」に変えた文であり、例(11)～例(14)は例(4)～例(7)に「¹Vp」を加えた文である。ここから、次重音等と重音等との文型の異なることがわかる。要するに、重音等「₁去/₁来」の後、「¹Vp」があれば、もともと重音等の「去/来」が次重音等になり、「不変意味」も「変化意味」になる。「₁Np」は補語なので、いつも主要動詞の後で働く、次重音等の「₁去/₁来」の後に来ない。

したがって、日常口語にある「去店里买菜」のような文の中の「去」は次重音等ではないし、文法語音構造も異なる。例えば、

(51) ₁去/₁来¹买菜

(52)*₁去/₁来₁店里¹买菜

(53) ₁去/₁来₁店里¹买菜

例(52)は成立しない。例(53)は音等がかわったので、他の文型になる(本文では論じない)。また、この「音等転換」^④の方法で、抽象的行為を表す文を二類に区分することもできる。

3.2.2. 抽象的行為

「挿入法」(注④参照)で、抽象的な文を二つの小類に分けられる。

a.類、例(15)のように、前後照応的なものがなく、「完成」、「帮助」、「想」等の動詞を用いる文である。この種の抽象的な文において、「₁Np」補語を文に

$S_2'(b)$ の二種類を $S_2'(b)^a$ と $S_2'(b)^b$ で表す。

次の文がそれぞれ $S_2'(a)$, $S_2'(b)^a$, $S_2'(b)^b$ を表現する例である。

(42) 媽々就₁去₁ / 来₁找二叔 (『全家福』)

$(S_2'(a) = \text{ }_1 Vx / \text{ }_1 Vy \text{ }^1 Vp')$

(ママはおじさんを探しに行った / O)

(43) 我馬上₁去₁ / 来₁帮忙 $(S_2'(b)^a = \text{ }_1 Vx / \text{ }_1 Vy \text{ }^1 Vp''a)$

(私はすぐ手伝いに行く / O)

(44) 用不懈的鑽研精神₁去₁ / 来₁攻克科学上的難関

$(S_2'(b)^b = \text{ }_1 Vx / \text{ }_1 Vy \text{ }^1 Vp''b)$

(怠けず探究精神で科学上の難関を攻めおとして行く / O)

4. 終りに

標準語においては、音等（意味に対応するもの）によって、文法問題を解釈することは、現代中国言語研究の歴史において、始めてのことだと思う。その新しい仕事をやり始めるときは、とにかく誤りを免れないことだと思う。言語学家から貴重な意見を頂きたいと心から願っている。

一附 記：

重音等「₁去 / ₁来」文は最近の二十年あまりの間に、口語から出て来た新しい文型である。老舍、王蒙の作品を調べた結果、一つもなかった。1979年湯廷池は：「更に、たくさんの人に、特に、若者の世代では、止点を直接に動詞「来」と「去」の後に置き、「到」を用いない。」といった（湯 1979, PP. 306）。これは、中国（大陸）では台湾と大体同時期に若者の口語から流行してきた。結局、八十年代の半ばごろに、中国の対外中国語教育の改革にしたがって、その文型は始めて、正式に中国の代表的な口語課程教科書（中国国家教育委員会直属北京語言学院 1985）に加えられたのである。それから、映画、放送、小説、語劇において、その文型も用いられており、標準語文型の一つと認められた。同時に、₁去 / ₁来が真の独立の自主動詞になった。しかし、今までのこれに関する研究において、「去」と「来」をはっきり分類

していないので、多くの疑問点が存在している。本論の研究は、新しい角度から試みたものである。

注釈

- ①：本文で、討論されたのは「音等」（意味に対応する言語表現における「律動形状」）を指す。一般には「ストレス」と言われているもの（音勢の強さ）と異なる。（他の論文で詳述する。）
- ②：日本語訳のないものを「O」で示す。又、中国語と異なるものもある。
- ③：湯廷池（1979, PP.301~305）、呂文華（1992, PP.246~247）、陸俊明（1993, PP.148）。
- ④：この方法は「挿入法」で音等に「転換」させることである。

参照主要文献：

- 陸俊明 1980~1991「陸俊明自選集」。河南：河南教育出版社（1993, 11）
邢福義 1980~1991「邢福義自選集」。河南：河南教育出版社（1993, 11）
朱德熙 1981「語法講義」。北京：商務印書館（1982, 9）
馬慶株 1981~1991「漢語動詞和動詞性結構」。北京：北京語言學院出版社（1992, 10）
徐烈炯 1990「語義學」。北京：語文出版社（1990）
徐烈炯 1988「生成語法理論」。上海：上海外語教育出版社（1988, 11）
「世界漢語教學」, 「語言教學與研究」雜誌編輯部編：「80年代與90年代中國現代漢語語法研究」。北京：北京語言學院出版社（1992, 3）
李臨定 1993「中國語文法概論」（宮田一郎訳）東京：光生館（1993, 6）
宮田一郎, 李臨定, 1992「中國語文法演習」。東京：光生館（1992, 10）
魯健驥主編 1985「初級漢語課本」。北京：北京語言學院出版社（1985）
劉月華, 潘文娛, 故犇「實用現代漢語語法」北京：外語教學與研究出版社（1983, 4）
趙元任 1968「A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE」, 台北：敦煌書局有限公司（1968）
呂叔湘 1980「現代語八百詞」北京, 商務印書館（1980）
徐世榮 1980「普通活語音知識」北京, 文學改革出版社（1980）
胡裕樹主編（1992）「現代漢語（增訂本）」香港, 三聯書店（香港）有限公司（1993）
張世祿「中國音韻學史」, 台灣, 台灣商務印書館股份有限公司（1986）
王力（1980）「漢語史稿」, 「漢語音韻學」北京, 中華書局（1982）
北大中文現代漢語研究室編（1993）「現代漢語」, 北京, 商務印書館（1993, 7）

- 湯廷池「漢語詞法句法1～4集」(1979, 1989, 1992, 1992) 台湾：台湾学生書局
- CHARLES N. LI, SANDRA A. THOMPSON (1983)「漢語語法 (Mandarin Chinese)」(黃宣範訳) 台北：文鶴出版有限公司 (1992, 1)
- 潘文國等 1992「漢語的構詞法研究」台湾，台湾学生書局 (1993, 2)
- 索緒尔 1916「普通語言学教程」高名凱訳，北京：商務印書館 (1980)
- 馮志偉 1984「現代語言学流派」陝西：陝西人民出版社 (1987)
- 万清華 1995「關於“去”与“来”動詞的歸類」日本：『中国語学』242号 (1995)
- 繆錦安：1990「漢語的語義結構和補語形式」上海：上海外語教育出版社 (1990, 11)

(1995年7月・日本神奈川大学)